

今回は、ジミー・ヴァン・ヒューゼン(Jimmy Van Heusen)という作曲科についてご紹介したいと思います。ご存知の方も少なくないと思いますが、スタンダードの佳曲をたくさん書いた人で、美しいメロディとアドリブしやすいコードの曲が多いことから、ヴォーカリストにもインスト奏者にも人気があり、現在でも演奏される機会が多いソングライターです。

ヴァン・ヒューゼンという名前を知らない方でも、曲名を知れば「ああ、あの曲かあ」と思い当たると思います。挙げてみると・・・

- ・ Moonlight Becomes You
- ・ Darn That Dream
- ・ All The Way
- ・ But Beautiful
- ・ Here's That Rainy Day
- ・ It Could Happen To You
- ・ Polkadots And Moonbeams
- ・ Like Someone In Love

などなど、良い曲が多いですね。ミュージカル5大作曲家（ジェローム・カーン、アーヴィング・バーリン、コール・ポーター、ジョージ・ガーシュイン、リチャード・ロジャース）には名を連ねていませんが、カーンやバーリンよりもジャズミュージシャンからは好まれた作曲家と言えます。中でもフランク・シナトラはヒューゼンの曲をたくさん吹き込んでいます。

5大作曲家と呼ばれるソングライターが、主に舞台ミュージカルを活動の場としたのに対して、ヴァン・ヒューゼンという人はちょっと違ったキャリアを持っています。ビング・クロスビーやシナトラなど名シンガーのお気に入り、ほとんど彼らのための曲を書きました。

1940年代には作詞家のジョニー・バークと組んで、当時人気絶頂だったビング・クロスビー主演の映画に幾つもの曲を提供しました。この時代の曲ではMoonlight Becomes Youが好きです。エンゲルベルト・フンパーディンクという自分が大好きなポップラーシンガーの音源もつけました。

- ・ クロスビーが映画で歌うシーン <https://www.youtube.com/watch?v=dUmkz95E7mw>
- ・ フンパーディンク <https://www.youtube.com/watch?v=N4ksLGwIYG4>

#### ◎難曲の名曲

この時期、Carnival in Flandersというミュージカル向けにも曲を書いています。この中のHere's that rainy dayという曲が素晴らしいんです。まずは、ミュージカルでこの曲を歌ったドロレス・グレイの歌で聴いていただきましょう。  
<https://www.youtube.com/watch?v=0k0S9q7ykGs>

これまでのメルマガで何回か紹介していますが、大好きなサミー・デイビスJrの歌も、もう一度挙げておきましょう。  
[https://www.youtube.com/watch?v=6xiB\\_Pf9Fc8](https://www.youtube.com/watch?v=6xiB_Pf9Fc8)

ヴァン・ヒューゼンの曲は、一聴とても自然な美しいメロディラインに聴こえて、実はコードが一捻りされていたり、アツと驚くような仕掛けがされていることもあります。この曲はその典型です。

この曲はメロディを正確になぞって歌おうとするとかなり難しいです。試しに、メロディを頭に入れ、しばらくしてから音を鳴らさずに自分のハミングだけで冒頭のメロディを歌ってみてください。最初からちゃんとメロディを歌うのは結構難しいと思います。自分はなかなかできませんでした。すぐできた方は、少なくとも自分よりは音感が良いと思われます(笑)。

なぜ音が取りにくいかというと、2小節目でいきなり転調しているからです。歌を歌う時には、頭の中でドミソのドの音を無意識にせよ認識しているのですが、この曲では冒頭からのMaybe I shouldまではドミソのソの音なのですが、次の歌詞に当たるhaveの音は、もうそのキーにない音なので、どの音がドなのか分からなくなってしまうのです。

普通の曲ですと、サビなどで転調する前に新しい調性に導くコードをつけることがほとんどですが、この曲では2小節目でいきなりです。こういう曲はスタンダードでは他に見当たりません。でも、それでいて聴いていけば不自然な感じが全くしません。1953年に始まったこのミュージカルは全く不評だったようで、すぐ打ち切りになり、ヴァン・ヒューゼンはその後ミュージカルから遠ざかりますが、この曲が残ってくれて良かったと思います。

この翌年、ヴァン・ヒューゼンにとって大きな転機となるフランク・シナトラとの出会いがありました。我らの街という映画のテレビ版でシナトラが出演することになり、ヴァン・ヒューゼンと作詞家のサミー・カーンに曲を依頼したのです。Love and Marriageという軽い曲ができたのですが、これをシナトラは気に入り、この二人をお抱えのようにしてたくさん曲を作らせ、それをヒットさせて行きました。

#### ◎シナトラのヒット曲

最も成功した曲の一つが、現在でも演奏されているAll The Wayです。とても美しいメロディを持った曲です。まずはシナトラの名唱で聴いていただきましょう。  
<https://www.youtube.com/watch?v=WxxDK0sFENo>

この曲は最初の4小節で引き込まれます。歌詞でいうと最初に「When somebody loves you」がミファファミミソラドと歌われます。ここはペンタトニックスケールと呼ばれる音階を使ったメロディから始まります。次の2小節目「good unless she loves you」では、陰りのあるコードをつけ、最後の「you」に当たる音は、最初のyouより半音高くなっています。

この動きで陰りを解決したいという音楽的エネルギーをため、次の「All The Way～」という歌詞の部分で一気に解き放つという感じがあり、とても印象的です。曲の良さはもちろんですが、それが稀代のシンガーであるシナトラの歌い方の魅力と合った時、名歌唱になって残っているんですね。

この曲についてはもう一つ楽しめる音源を見つけました。セリーヌ・ディオンが歌っているのですが、シナトラの音源と時には遅らせ、時には先行させるというやり方で歌っています。テーマメロディを2拍先行したり後行させているので音楽的デメリットができてしまうのですが、シナトラへのリスペクトを込めてという意味合いを優先したのだと思います。なかなか楽しめます。  
<https://www.youtube.com/watch?v=sxps4ggfoy4>

次はIt could happen to youを聴いて頂きたいです。これも実にメロディが良い好曲で、コード的にもひねりが効いていてアドリブのしがいがある、つまりジャズミュージシャンの大好物の要素があることから、インストミュージシャンがよく取り上げています。

まずは有名なマイルス・デイヴィスの1956年の録音から聴いていただきましょう。最初、この音源はコルトレーンがまだ未熟な感じがあり、挙げないでおこうと思ったのですが、念のため聴いてみると、コルトレーンは楽器の吹き方自体は今一つ上手いとは思えないのですが、コードの特徴を実にうまく捉えて歌っていると再認識しました。  
[https://www.youtube.com/watch?v=r\\_ZUc-5ZAU8](https://www.youtube.com/watch?v=r_ZUc-5ZAU8)

もう一つはスコット・ハミルトン(ts)です。この人は楽器が実にうまくて、テナーサクソらしい低音の魅力も十分。ボサノバのリズムに乗せて流れるように良い感じで演奏しています。ハミルトンはテーマを吹いた後、2分過ぎ辺りからアドリブを展開します。  
<https://www.youtube.com/watch?v=u86r11GvEZk>

この音源のコピー譜があったので、楽器を演奏される方のために付けておきます。ピア

ノ、サクソ、ベースのアドリブを譜面化しています（検証はしていません）。  
[https://www.youtube.com/watch?v=gW-a\\_yZ1yLY](https://www.youtube.com/watch?v=gW-a_yZ1yLY)

◎パウエルとエヴァンスの名演を聴き比べ

ヴァン・ヒューゼンの曲でもう一つご紹介したいのは、Polkadots And Moonbeamsで、youtubeで探しても名演が多いです。チェット・ベイカー(tp)やウェス・モンゴメリー(gt)の演奏も良いですが、ここではピアニスト二人の名演を挙げておきます。

まずはピアノにおけるモダンジャズの開祖とも言うべきバド・パウエルの演奏を聴いていただきましょう。テーマのみの短い演奏ですが、かなり尖った音も入れた両手ヴォイスシングが耳にガツンと来る感じです。デジタルリマスターしただけあって音質が良いです。  
<https://www.youtube.com/watch?v=h4JFwxXXOHg>

次はビル・エヴァンスです。Moon Beamsというアルバムに収録されています。2分22秒あたりまでがテーマですが、エヴァンスにしては単音メロディ中心にシンプルに弾いています。アドリブはAABA構成の前半部分を弾いていますが、ここはとても美しくてなおかつスイングしています。3分32秒あたりからは後半部分のテーマを両手ヴォイスシング中心に弾きますが、これも素晴らしい。  
<https://www.youtube.com/watch?v=4NTxWQfMSsA>

読者の皆さんはどちらがお好みだったでしょうか？ジャズミュージシャンに演奏されてヴァン・ヒューゼンが嬉しかったかどうかは分かりませんが、パウエルやエヴァンスにこの曲の価値を認めて選んだからこそこういう名演が生まれたわけで、違ったアプローチで別の魅力を引き出せるところが名曲の所以なのでしょう。こういう演奏をLydianのピアノで聴けたらなあと思ってしまいました。田窪寛之さんや魚返明未さんなら素晴らしい演奏を聴かせてくれそうです。

最後にジミー・ヴァン・ヒューゼンという一風変わった名前の由来をご紹介しますおきましょう。エドワード・チェスター・バブコックというのが重々しい名前が本名ですが、本人はこの名前が大嫌いだだったという話も伝わっています。高校時代にラジオ番組でピアノを弾くことになったのをきっかけに、有名なシャツメーカーのPhillips-Van Heusenという会社名を借りて芸名にしました。

オランダ風で作曲家にはぴったりのちょっと粋な名前という感じがしますよね。ちなみに、このシャツメーカーは、PVH Corp.と頭文字を取った社名に変わっていますが、今でもアメリカの有力な衣料品メーカーです。CALVIN KLEINやTOMMY HILFIGERという有名なブランドを持っていますし、Van Heusenというブランドのシャツも人気があるようです。

-----